第 9 回　日本生殖再生医学会
2014.03.16、大阪

胚盤胞の形態評価と胎児染色体異常の関連

松本　由香、赤松　芳恵、佐藤　　学、橋本　周、姫野　隆雄、井上 朋子、
伊藤 啓二朗、中岡 義晴、森本　義晴
医療法人三慧会 IVF なんばクリニック

【目的】体外受精において胚の形態評価は、移植する胚の選択基準であり、妊娠に結びつくかどうかを予測する指標となる。胚盤胞の形態評価は、Gardner 分類に基づき発育速度(グレード BL1-6)と、内細胞塊（ICM）および栄養外胚葉（TE）の細胞状態(グレード A-C)によって行い、これらの評価は妊娠率、流産率に影響を与えると考えられている。本研究では、胚盤胞の形態評価と、妊娠初期流産の主因である胎児染色体異常との関連について検討した。【対象と方法】2004 年 1 月から 2013 年 12 月までに当院にて胚盤胞移植を実施し流産と診断され、絨毛染色体検査を行った 216 症例（Day5：159 症例、平均年齢 35.8±3.8 歳、Day6：57 症例、平均年齢 36.2±3.9 歳）を対象とし、移植胚盤胞のグレードと染色体異常率について検討した。【結果】Day5 の染色体異常率は 74.2%(118/159)となり、BL3 で 70.0%(21/30)、BL4 で 79.1%(53/67)、BL5 で 69.8%(37/53)、Day6 の染色体異常率は 59.6%(34/57)となり、BL3 で 75.0%(3/4)、BL4 で 73.7%(14/19)、BL5 で 50.0%(17/34)と全てのグレード間で差は認められなかった。ICM がグレード A の胚盤胞は、染色体が正常な胚盤胞のうち 23.4%(15/64)、染色体が異常な胚盤胞のうち 23.7%(36/152)に認められた。また、TE がグレード C の胚盤胞も、染色体が正常な胚盤胞のうち 28.1%(18/64)、染色体が異常な胚盤胞でも 28.3%(43/152)で差はなかった。【結論】Day5、Day6 それぞれ発育速度による染色体異常率に差はなく、染色体異常の発生頻度との関連は認められなかった。また、TE の形態評価と胎児染色体異常の関連は認められなかった。